**記念講演「生きてるってシアワセ！～ガンになっても幸せです～」**

**講師：大谷 貴子 氏（特定非営利活動法人 全国骨髄バンク推進連絡協議会 会長）**

**【導入】**

記念講演の講師には、ご自身も白血病をはじめ複数のがんを克服され、骨髄バンクの設立に尽力された大谷貴子氏をお迎えした。埼玉県在住ということもあり、会場は終始和やかな雰囲気に包まれた。大谷氏は、まず民生委員・児童委員の日頃の活動に深い敬意と感謝を述べられ、ご自身の壮絶な体験と、そこから生まれた社会を変えるための行動について、力強く、そして時折ユーモアを交えながら語られた。そのお話は、私たち委員一人ひとりの心に深く響くものであった。 以下、内容を要旨にまとめた。

**はじめに ― がんになっても幸せ**

演題に掲げられた「がんになっても幸せ」という言葉。身内をがんで亡くされた方もいる中で、この言葉を発することへの葛藤を抱えつつも、ご自身の正直な気持ちとして、幸せであると大谷氏は語り始めた。 その背景には、25歳で血液のがんである「急性骨髄性白血病」と診断されて以来、子宮頸がん、大腸がん、皮膚がんと、次々にがんを経験しながらも、そのすべてを早期発見できたという幸運があった。「がんのモグラ叩きみたい」と明るく語るその姿は、壮絶な闘病生活を感じさせない力強さに満ちていた。 また、ご自身の母親が91歳で一人暮らしを続ける中で、民生委員の方々に大変お世話になっていることにも触れ、改めて日頃の活動への感謝を述べられた。 せっかく生かされたこの命で、何か社会にお返しをしなければならない。その強い思いが、今日に至るまでの様々な活動の原動力となっている。大谷氏の講演は、ご自身の経験を通して、私たちに「生きること」、そして「社会と関わること」の意味を問いかけるものだった。

**「なんでや」― 骨髄バンク設立への原点**

大谷氏が25歳の時、「急性骨髄性白血病」は有効な治療法がない「死の病」とされていた。そんな中、唯一の希望としてアメリカからもたらされたのが「骨髄移植」だった。しかし、主治医から告げられたのは、「移植にはドナーが必要ですが、あなたに合うドナーは、この日本にはいません」という絶望的な言葉だった。 治療法が世の中にあるにもかかわらず、骨髄を提供してくれる相手がいないために治療が受けられない。病気になったこと自体が不幸だとしても、ドナーの有無という偶然でその後の人生が左右されてしまう。この理不尽さ、不平等に対して、大谷氏の心に「なんでや」という激しい怒りが湧き上がった。なぜ、経済大国である日本に、誰もが公平に治療を受けられる仕組みがないのか。この社会への素朴な、しかし根源的な問いと怒りこそが、後に骨髄バンク設立へと繋がる社会活動の原点となった。 「国が必要なものは作りますよ」と他人事のように話す厚生省の担当者。その横で別の職員が放った「何やったら、あんたが作ったらええやんか」という一言が、悔しさとともに大谷氏の背中を押した。自分には間に合わなくても、自分が動けば将来誰かが助かるかもしれない。その思いが、大谷氏を前へと突き動かしたのである。

**声を上げたからこそ道は開けた**

自分に何ができるのか。残された道は「署名活動」だけだった。100万人の署名をどう集めればいいのか見当もつかない中、新聞社に駆け込み、一人の若い記者がその訴えを大きな記事にしてくれた。すると、すさまじい反響があり、寄付や協力の申し出が殺到した。人の優しさに触れ、「絶対に生き延びたい」という思いを強くしたという。 そして、奇跡が起こる。署名活動をきっかけに、大谷氏の骨髄の型を研究しているという人物から連絡が入ったのだ。両親の出身地が近かったことなど、偶然が重なり、通常は半分しか合わない親子の型が、母親と完全に一致することが判明した。まさに奇跡的な適合だった。 「助けてほしい」「なんでやねん」と、ただ待つのではなく自ら声を上げたからこそ、専門家と繋がり、命の道が開けたのだ。この経験は、「個人の強い思いが社会を動かす」という大谷氏の信念の礎となっている。 しかし、喜びばかりではなかった。同じ病室にいた中学3年生のMちゃんは、ドナーが見つからないまま亡くなった。彼女が卒業文集に綴った「普通の高校に行き、普通に就職し、普通に結婚して、普通のお母さんになりたい」という「普通」の夢。その言葉の重みが、大谷氏に骨髄バンクの設立を固く誓わせた。

**120万人の声が国を動かした**

Mちゃんや、今も苦しんでいる多くの患者のため、大谷氏は署名活動を再開した。多くの人々の共感と協力の輪が広がり、約3年間で120万人もの署名が集まった。そして、その大きな声が国を動かし、1991年12月、ついに日本に骨髄バンクが国の制度として誕生した。 これで自分の役目は終わった、と一度は大谷氏も考えたという。しかし、国が作るのはあくまで「形」であり、器に過ぎない。本当に患者の役に立つ制度にするためには、当事者である患者の声を反映させ続けなければならない。そう気づいてから37年間、休むことなく活動を続けている。 「他人のためにそこまでできますね」と言われることもあるが、大谷氏は「これは他人事ではなく、自分のため、家族のためでもある」と断言する。いつ誰が当事者になるか分からない時代だからこそ、社会の問題を「自分ごと」として捉え、行動し続けることの重要性を、その姿は示している。骨髄バンクの設立はゴールではなく、より良い社会を目指すための新たなスタートだったのである。

**当事者の声から社会の課題を捉える**

骨髄バンクの活動を続ける中で、大谷氏の視点は、がん患者が抱える様々な問題へと広がっていった。 一つ目は、がん治療による「妊孕性（にんようせい）」の問題。抗がん剤治療によって子どもができなくなる可能性について、自身が治療後に知った経験から、治療前に精子や卵子を凍結保存できる選択肢があることを患者に伝える啓発活動を開始。今では、治療前に医師からの説明がなされ、誰もが希望すれば制度を利用できるようになった。 二つ目は、若年性がん患者の在宅緩和ケアの問題だ。32歳の若さで胃がんで亡くなった姪が、最期を家で過ごしたいと願ったものの、当時は若い世代を支える在宅ケアの制度が整っておらず、地域格差も大きかった。この理不尽をなくすため、仲間たちと行政や国会に働きかけ、国の制度として確立させた。 そして最近では、「男性トイレにサニタリーボックスがない」という問題に取り組んでいる。前立腺がんなどの術後に尿漏れパッドを使う男性が、使用済みパッドを捨てる場所に困っているという当事者の声。これをSNSで発信したところ、大きな反響を呼び、国の基本計画にも盛り込まれるなど、社会を動かす大きなうねりとなっている。 これらの活動はすべて、一人の当事者の切実な声から始まっている。その声に耳を傾け、社会全体の課題として光を当てること。それこそが社会をより良く変えていく第一歩なのだと、大谷氏は教えてくれる。

**「思う」ことの力 ― 地域課題に向き合う私たちへ**

大谷氏の父は、いつも「I can, I can（私にはできる）」と言っていたという。何かを成し遂げたいと強く「思う」ことが何よりも大切だ、と。白血病になった当初は、その教えを恨んだこともあった。しかし、多くの人に支えられて命を永らえ、様々な活動を続けてこられた今、やはり「思う」ことの力が周りを動かし、社会を変えていくのだと実感している。 「ここにいらっしゃる民生委員・児童委員の皆様も、きっと『おせっかい』で、困っている人を見ると放っておけない、優しい心をお持ちなのだと思います」と大谷氏は語りかける。その活動は、時に大変なこともあるだろう。しかし、それは誰かのためだけでなく、巡り巡ってご自身の知識や人間関係を豊かにし、世界を広げているはずだ、と。 個人の強い思いと行動力が、やがて社会を変える大きな力になる。大谷氏の生き様そのものが、その何よりの証明である。講演の最後は、私たち委員の活動への心からの敬意と、この場で話せたことへの感謝の言葉で締めくくられた。大谷氏から受け取った熱いエールを胸に、私たちもまた、地域のために「思う」ことから始め、一歩を踏み出していきたい。